

シCHEDリン：ベートーヴェンのハイリゲンシュタットの遺書

――管弦楽のための交響的断章――

タイトルが示すように、この曲は現代ロシアの作曲家、ロディオ・シCHEDリン（1932 生）によるルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン（1770-1827）へのオマージュ、今流に言うなら「リスペクト（尊敬）」作品である。しかも題材は「ハイリゲンシュタットの遺書」。ベートーヴェンの人生最大の苦悩だった耳の病を告白した、あの有名な「遺書」である。

1802 年 10 月、療養で訪れていたドイツのハイリゲンシュタットで書かれたこの遺書には、「ああ、ほかの人々よりはもっと完全であるべき私の一つの感覚〔聴覚のこと〕がだめだということ、どうして認められようか。……人には羊飼いの歌うのが聞こえても、私には何も聞こえなかった時、それは私にとってなんという屈辱であったことだろう。このような出来事は私をほとんど絶望の淵に陥れた。絶望がもう少しでも大きければ、私は自らの命を絶っていたことだろう」（西原稔訳）とある。だが、そのあとに「ただ芸術だけが私を引き止めた。自分のなかにあると感じているものすべてを生み出すまでは、この世を去ることはできないと思った」（同）とあり、芸術家として生きる決意がはっきりと表明されている。2 人の弟に宛てて書いたこの「遺書」は、投函されなかった。今ではベートーヴェンの芸術家としての決意表明とみなされている。実際に、この時期からベートーヴェンの創作意欲はいちだんと高まり、本日の《ピアノ協奏曲第 3 番》や《交響曲第 3 番「英雄」》といった傑作が次々に完成されていくことになる。

シCHEDリンは指揮者、マリス・ヤンソンスとバイエルン放送交響楽団から新作を委嘱された時、つねに関心を持ってきたベートーヴェンの「遺書」に基づいて書くことを決めたという。「ついに彼は生きる力を見出し、第 3 交響曲を描き始めた」とシCHEDリンが述べているように、この曲にはベートーヴェンが苦悩を克服し、力強く歩み出すまでが描かれている。初演は 2008 年 12 月 18 日、ミュンヘンで行われた。

楽器編成は、ベートーヴェンの交響曲第 3 番「英雄」と同じ 2 管編成を基本としながらも、ピッコロとトロンボーン（3）が加えられた。曲はベートーヴェンの苦悩を表すような「マエストロ・コン・グラヴェ（勇壮に、重々しく）」の重厚な響きで開始される。そのあとアレグロの速いテンポで、弦と管が 16 分音符の刻みで緊迫したやり取りをし、再び最初の勇壮な響きに戻ってくると、今度はヴァイオリンが新しい不安な主題を歌い出し、木管がそれを受け継ぐ。再び 16 分音符の動きで緊迫感が高まり、重々しい和音の後、ティンパニの静かな響きの上にオーボエの不安げな旋律が現れ、ピッコロとヴァイオリンの耳鳴りのような高音がそれに伴う。16 分音符と激しい和音が突然休止したあと、新しい世界が開ける。明るい長調の和音が鳴り響いたあと、最後に聞こえるのは「レ-ファ#-レ-ラ」の音。これこそ交響曲第 3 番「英雄」の冒頭の音形にほかならない。希望とともに、曲は閉じられるのである。

遠山菜穂美

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。

楽器編成：ピッコロ、フルート 2、オーボエ 2、クラリネット 2、ファゴット 2、ホルン 3、トランペット 2、トロンボーン 3、ティンパニ、弦五部

※スコア上の表記